

建築分野における新規工業高校卒業就職者の離職率の低減についての一検討

—工業高校建築科における進路指導—

高知工科大学システム工学群

1210046 俣山 優太

建築分野 新規工業高校卒業就職者 離職率

1. はじめに

以前より建設業界における就業人口の減少や高齢化が問題視されてきたが、依然として解決されていない。建設業界における、新規大学卒業就職者（以下「新規大卒就職者」）の三年内の離職率¹⁾は全産業平均¹⁾を下回る数値を推移しているが、新規高校卒業就職者（以下「新規高卒就職者」）の三年内の離職率²⁾は全産業平均²⁾を上回る数値を推移している。このことから、高校卒業（以下「高卒」）で建設業に従事する者より大学卒業（以下「大卒」）で建設業に従事するの方が、離職率が低いことがわかる。

本研究では、建築分野における新規工業高校卒業就職者の三年内の離職率の低減を目指し、現在の工業高校建築科におけるキャリア教育、進路指導を見直すことを目的とする。

2. 研究方法

工業高校建築科に在籍する三年生と二年生及び高知工科大学システム工学群建築・都市デザイン専攻に在籍する四年生を対象にアンケートを実施した。就職に対する意識や高校や大学で行われているキャリア教育の実情から、現在の高校におけるキャリア教育の課題を探す。自身の体験や文献調査により得られたデータから対応策の検討を行う。

3. 調査内容および分析結果

3.1 アンケートについて

高校生と大学生を対象に以下の内容でアンケートを採り、以下のものから回答を得ることができた。

【アンケート内容】

- ①回答者について（出身地等）
- ②理想とする企業や就職活動（以下「就活」）について
- ③高校で受けたキャリア教育について
- ④大学で受けたキャリア教育について（大学生のみ）
- ⑤転職について
- ⑥実際の就活について（就職する人のみ）
- ⑦就職及び進学への関心について

【アンケート回答者】

- ・香川県立高松工芸高等学校建築科
- ・香川県立坂出工業高等学校建築科
- ・香川県立多度津高等学校建築科
- ・高知県立高知工業高等学校建築科

各高校二年生 計 141 名 各高校三年生 計 133 名

・高知工科大学システム工学群建築・都市デザイン専攻
四年生 計 47 名

3.2 主要なアンケート結果とその考察

3.2.1 高校生の転職に対する意識

表 1 より 23 人が将来転職をしたいが、日本における転職へのイメージはマイナス思考で、キャリアアップの転職も普及していないと回答している。一見に日本における転職の現状を理解したうえで、夢を見ているようにも思えるが、23 人の中には転職を楽観視している者がいることが考えられる。実際に転職を行う時に理想と現実のギャップから理想通りのキャリアアップができないことが考えられる。また、21 人が将来転職をしたくないが、日本における転職へのイメージはプラス思考で、キャリアアップの転職も普及していると回答している。このことから、転職に関心がないため日本において転職が困難なことを知らないと考えられる。そのため、自身が転職を余儀なくされたときに現実とのギャップを知り、苦労することや挫折することが考えられる。

表 1 高校三年生の転職に対する意識

将来転職したいか	日本における転職のイメージは	キャリアアップを目的とした転職は普及しているか	人数[人]
したい	プラス思考	思う	5
		思わない	2
	マイナス思考	思う	0
		思わない	23
	その他	思う	0
		思わない	0
したくない	プラス思考	思う	21
		思わない	8
	マイナス思考	思う	13
		思わない	35
	その他	思う	6
		思わない	8

3.2.2 全員が建築分野に従事したいわけではない

図 1 からわかるように建築科の生徒だから全員が明確に建築分野で働きたいと考えているわけではない。特に「わからない」と回答した生徒は建築分野で働くかを決めかねている中での進路選択となるため、ミスマッチが起りやすくなると考える。



図 1 「建設業に従事したいか」への回答 単位[人]

3.2.2 高校生が就活で意識すること

就活を行った高校生 71 人に「就活の際に重要視した項目を選んでください。(二つまで選択可)」とアンケートを採ったところ表 2 の結果となった。37 人が給料を意識したと回答し、21 人がやりがいを意識したと回答した。しかしながら、やりがいとは主観的なものであり、人によってその度合いは異なる。給料についても高卒より大卒のほうが初任給は高いにもかかわらず、高卒で就職することを選んでいることからベストな就活ができていない可能性があると考える。

表 2 就活時に重要視したこと 単位[人]

給料	37	社会貢献度	4
仕事内容	33	事業所規模	3
やりがい	21	勤務地	3
休暇	15	その他	1
福利厚生	11	評価制度	0
周囲の人の意見	7		

4. 考察から想定される問題

4.1 制限される高卒の転職

キャリアアップとは自身の価値を高めることを指し、ゴールとしては、起業や大手企業への転職などがある。建設業の大手 10 社³⁾の内、高卒のキャリア採用を行っていることを明記している企業は 3 社^{4) 5) 6)}である。ほかにも高卒には基本給や職種に多くの制限があり、思うように転職できないことが考えられる。しかしながら、高校のキャリア教育ではこのようなことを指導していないため、多くの高校生が現実にそぐわないキャリアプランをして卒業する。

4.2 ミスマッチの可能性 I

建築分野で働きたいかわからない状況で進路選択をすると、親や教師の助言に流されてしまい、何も知らないまま自分の意図していない企業に入社する可能性がある。そのためミスマッチが起きてしまい、三年内に離職することが考えられる。本研究におけるアンケートでは 9 人の高校生が建築分野に従事したかわからないまま就職活動をしている。

4.3 ミスマッチの可能性 II

インターンシップなどの体験以外でやりがいを評価するのは難しく、体験しても数値化するのは非常に困難である。またやりがいとは主観的なものなので、パンフレットや他人からの意見で判断すると、結果としてミスマッチにつながってしまう。給料も同様で、昇進スピードや役職手当は企業で異なるため、初任給のみで一概に判断していると、入社してから「想像と違った。」となる可能性がある。

5. 対応策の検討

5.1 高卒であることの教育

工業高校におけるキャリア教育の一環として、日本における高卒が行うキャリアアップの現状について教育する。将来積極的に転職行おうと考えている生徒に対しては、将来転職しやすいように大学への進学を勧める。

5.2 前向きな大学進学

建築分野に従事することを悩んでいる生徒に対して、以下の理由から建築分野を学べる大学への進学を勧めるべきであると考えられる。

- ① 高校では建築分野のみを学習するため、土木分野についても学習することで建設分野全体を知る。
- ② 時間の猶予を作ることによって落ち着いて考えられる。
- ③ 高校で勉強したことを活かすことができる。建設について知識を深めながら、余裕をもって自分の将来を考えることで建築分野を好きになってもらい、従事したいと思ってもらえるようになると思われる。

6. 結論

工業高校建築科における進路指導について検討した結果、以下の結論を得ることができた。

- (1) 高校生は日本における転職の現状を理解しておらず、転職を楽観視しているため、日本における高卒が行うキャリアアップの現状について教育する。積極的に転職することを夢見ている生徒には大学への進学を勧める。
- (2) 高校生全員が明確に建築分野に携わりたいとは考えていない。特に、建築分野に従事することを悩んでいる生徒に対しては、建築分野を勉強できる大学への進学を勧める。

参考文献

- 1) 「厚生労働省 新規学卒者の離職状況 新規学卒者の事業所規模別・産業別離職状況 大学 グラフ」より算出
- 2) 「厚生労働省 新規学卒者の離職状況 新規学卒者の事業所規模別・産業別離職状況 高校 グラフ」より算出
- 3) 「業界動向 SEARCH.COM 建設業界 売上高ランキング (2019 - 2020 年)」より上位 10 社
- 4) 竹中工務店 採用情報・インターンシップ情報 キャリア採用 募集要項 施工管理 (建築) 施工管理 (設備)
- 5) 前田建設工業株式会社 採用情報 中途採用 土木・機電技術者 建築・設備技術者
- 6) 三井住友建設 採用情報 キャリア採用 募集要項 キャリア採用 (技術職)